様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　１９日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007　～ 2009
課題番号：19520241
研究課題名（和文）：アメリカン・ルネッサンスにおける同時代ヨーロッパ思想のインパクト研究

研究課題名（英文）：The Impact of Modern European Thought on American Renaissance

研究代表者
竹内　勝徳（TAKEUCHI　KATSUNORI）
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：40253918

研究成果の概要（和文）：
本研究の主な研究成果として、日本アメリカ文学会の研究誌である『アメリカ文学研究』第46号に掲載された「“Clap eye on” Captain Pe(g)leg/Ahab―メルヴィルによる『白鯨』の原稿修正と反ナショナリズムの衝動」、並びに、日本英文学会の研究誌である『英文学研究』に投稿中の「アメリカン・ダイアレクティクスの行方」が挙げられる。前者では、デカルトによる精神と身体＝「モノ」の二項対立がエイハブというキャラクターにどのような形で取り入れられているのかという発想から、メルヴィルのテクスト創作が文章という「モノ」に対する不安定な対応であり、その表れとして『白鯨』の原稿修正が位置づけられるとする前提を設定した。これを前提に、『白鯨』の修正が当時の政治状況と密接な関係において展開しており、メルヴィルは母国アメリカの民主党イデオロギーから脱却するために、当初のピークォド号の船長Pegleg から片足の船長という役柄をエイハブに移したと論じた。この片足の扱い自体がメルヴィルの身体＝「モノ」に対する不安定な対応、並びに、テクストに対する不安定な対応を表している。即ち、デカルトの精神論では解決できない身体＝「モノ」の存在論的な重さにメルヴィルは気付いていたのである。後者の論文では、カントからショーペンハウエル、ヘーゲルと続く西洋思潮の流れに、エマソンやソロー、ホーソーン、メルヴィルの思想を対置し、特にホーソーンとメルヴィルを総合的に比較したものである。カントにとっての現象は主体の内面の反映であり、「モノそれ自体」は成立しない。これはエマソンやホーソーンにも共有された現象観である。だが、ホーソーンはヘスター・プリンとパールの姿によって、欲望や罪の象徴となりながらもその精神現象としての存在から離脱しようとする客体を描いた。メルヴィルが『白鯨』において共感したのはこのような精神の反映となりきれない客体、上述の言葉で言うと身体＝「モノ」の諸相であった。しかしながら、ホーソーンはそうした不気味な「モノ」としての客体に気づきながらも、ヘーゲル流の弁証法によってその領域からの発展的脱却を図る。一方のメルヴィルはその領域へ囚われることの根源的な魅力に取りつかれている。彼らそれぞれの最終小説作品、『大理石の牧神』と『ビリー・バッド』にみられるのは、現実を精神の反映として捉えきれない主人公が弁証法的に成長するか、あるいは、元の領域に留まったまま美を表現するに至るかの、その大きなギャップである。メルヴィルのビリーが後者に該当するのは言うまでもない。精神の主体的な働きに還元することなく美が立ち現れる様は、ベルグソンの言う記憶の創造作用を思わせる。

研究成果の概要（英文）：
This study brought forth two main achievements: “‘Clap eye on’ Captain Pe(g)leg/Ahab: Herman Melville’s Anti-Nationalistic Revision of the1850 Manuscript of *Moby-Dick*” submitted to *The Journal of the American Literature Society of Japan* and “Development of American Dialectics: Resonance and Contrast between Herman Melville’s *Billy Budd* and Nathaniel Hawthorne’s *The Marble Faun*” submitted to *Studies in English Literature*. In the former article, I began the arguments from the question of whether Melville reflected on Captain Ahab the Cartesian dualism of spirit and body or the thing

itself, and surmised that Melville's revision of the manuscripts of *Moby-Dick* was the manifestation of his instable attitude toward the textual "thing." On the basis of this surmise, I developed the thesis that the revision of *Moby-Dick* was in close relation to the political situation of those days, and Melville shifted the role of an one-legged captain from Pe(g)leg to Ahab in order to alienate himself from the ideology of American democracy. This shift shows Melville's instable response to the body or the thing itself, or to the text as a thing, which is the evidence of his noticing of ontological ineffability of the body or the thing itself incapable of being resolved by the Cartesian spiritualism.

In the latter article, I analyzed Herman Melville's *Billy Budd* and Nathaniel Hawthorne's *The Marble Faun*, their last novels published many years apart and long after the fading of their ardent friendship. Above all, the two works deal with the same motif, an innocent young man's murderous act. Behind this motif lies an important socio-philosophic issue: if there lurks fierce violence beneath a natural mind, how can human beings guide that animalistic impulse to a tamed, harmless condition? To put it in a simple way, how can wild nature be reconfigured through civilizing process? Upon this, they propose opposite answers; while Hawthorne's Donatello changes into an intelligent being through penitence, Billy Budd is executed to death. Significantly, Billy's original innocence remains the same.

Before the two writers reached such difference, their texts had resonated and contrasted with each other through the discovery of untamable nature concealed behind the Kantian phenomena and the acceptance of the Hegelian progressivism. By explicating the process of this development and locating the two writers in a stream of Western philosophy, this essay looks into their views of human growth from natural states to social beings, and then makes clear what Donatello and Billy's different destinies signify. In analyzing their ideas, this essay uses Hegel's terms, "mediation" which means an act of connecting an object with spiritual or linguistic meanings and "immediacy" which means a state of an object disconnected with any spiritual or linguistic meanings.

Kant defines the external phenomena as reflection of a human being's inner state, and states that what lies behind reflection, or "the thing itself" cannot be recognized. Hawthorne and Melville criticize this idea in their early works. For example, Hawthorne looks beyond this reflection, creating Pearl both as another scarlet letter signifying Hester's sinful mind and as a character who loses "reference and adaptation to the world." Though Pearl is being built into the society, her wild nature resists being codified in the Kantian externalization of the inner state. Melville's Captain Ahab looks at Moby Dick as the reflection of his own evil nature, and at the same time, tries to step beyond "[a]ll visible objects" or the limit of human experience, merging with nature itself.

Obviously, Donatello's "savage fierceness" follows Pearl's case. He cannot repress his wild nature and tries to murder Antonio. However, after the incident, Donatello learns to sense the reflection of his sinful mind, and recovers "the sweet and delightful characteristics of the antique Faun" in a new way, which means his past nature reflected on the Faun has been mediated with his newly gained intellect. Now he is not what he was. Thus, his existence is placed in the constant mediation between the spiritual and the material, the inner and the outer, the past and the present, and his personality is always renewed. Here, Hawthorne went over the Kantian phenomenology and adopted the Hegelian progressivism. On the other hand, though Melville's characterization of Billy Budd is analogous to Hawthorne's Donatello and Billy commits the same crime as Donatello, Billy's natural state does not change. In a meaning, Billy's stutter can be interpreted as the case of failure in the Hegelian mediation. Rather, Melville, by describing a sailor who composes a ballad from Billy's tragedy, finds a way of recovering beauty not through spiritual operation, but through immediate integration of past experiences by the workings of memory. At the final stage, the two writers found the highly different aesthetics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度			
２００６年度			
２００７年度	300,000	90,000	390,000
２００８年度	200,000	60,000	260,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
総　計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学・英米文学
キーワード：(1) ナサニエル・ホーソーン (2) ハーマン・メルヴィル (3) 西洋思想 (4) アメリカン・ルネッサンス (5) アメリカ文学 (6)『白鯨』 (7) イマニュエル・カント (8) ジョン・ロック

１．研究開始当初の背景

アメリカン・ルネッサンスの膨大な研究史において指摘できるのは、アメリカン・ルネッサンス作家とヨーロッパ思想との関係性に焦点を当てた研究が非常に少ないということであった。アメリカン・ルネッサンスの作家は同時代ヨーロッパの文学者よりも、ロック、カント、ヘーゲル、シェリング、ショーペンハウアー、フレーベルなど、思想家に強い影響を受けているにもかかわらず、である。また、それに関連して、特に、構造主義以降、作者の美学や芸術観を作品から読み取るという文学研究の基本とも言えるアプローチが少なくなっていた。美学や芸術観の部分は古い作家観を踏襲し、研究法だけが更新されている感が拭いきれなかった。

２．研究の目的

本研究は、上記の背景に鑑み、アメリカン・ルネッサンス作家と同時代のヨーロッパ思想との関係性を綿密に分析、調査し、以下の目的を達成するものである。（１）同時代のヨーロッパ思想から作家への影響を、その経路（書物から直接か、第３者を媒介にしたか）を特定したうえで明確化する。（２）ヨーロッパ思想の影響、あるいはその影響への対応がどのような形で作家の美学、芸術観へと結びついたのか明らかにする。（３）ヨーロッパ思想と文学作品を比較し、両者の芸術観の相違を明確にする。（４）作家の美学や芸術観を明確にしたうえで、時代のコンテクストとの関係を明らかにする。（５）西洋思潮の中に作家を位置づけると共に、他国の作家と比較し、作家の独自性を明らかにする。（６）最新の Web テクノロジーで成果発表を行う。

３．研究の方法

「研究の目的」の欄で述べた（１）～（５）の目標を達成するために、本研究では、(A)伝記的アプローチ、(B)テクスト分析、(C)コンテクスト研究、の３つのアプローチを取った。なお、ホーソーンとメルヴィル、カント、ヘーゲル、フレーベルの主な著作は既に精読しているので、それを前提に計画を立案した。(A)伝記的アプローチでは、重要な伝記的事実に着目し、作家がヨーロッパ思想をどのような経緯で知り、それに対してどのような考えを持ち、どう対処したのかを明らかにする。即ち、上記の５つの目標のうちの（１）（２）を達成する。このアプローチで必須なプロセスは、鍵となる伝記的局面の特定である。(B)テクスト分析では、どのようなヨーロッパ思想がいかなる形でテクストに表れ、それに作者がどのような反応をしているのかを作品中に読み取る。即ち、上記の５つの目標のうちの（３）を達成する。この場合、単に漠然と読解しても結果は得られないので、思想と文学を比較する軸を明確にする必要がある。(C)コンテクスト研究は、(A) (B) のアプローチから得られた結果を踏まえ、作家と時代の文脈の関係性を総合的に捉えると共に、他国の文学との比較を通し、西洋思潮の中に作家を再定位させる。即ち、上記の５つの目標のうちの（４）（５）を達成する。

４．研究成果

平成 19 年度の研究成果としては、まず日本アメリカ文学会での研究発表「アメリカン・ダイアレクティクスの行方」が挙げられる。この発表において、ホーソーンとメルヴィルの散文としての最終作を比較し、カント

らヨーロッパ思想からの影響を受けたと思われる現象観の変容や、ヘーゲルとはまた様態の違う弁証法的認識論を展開していく様を明らかにした。その中で特に力点を置いたのは、フレーベルやピーボディからの影響と思われるホーソーンの教育観の位置づけであった。平成 20 年度の成果発表としては、九州のエマソン、ソロー研究のリーダーである高橋勤氏と組み、日本ナサニエル・ホーソーン協会の九州支部大会でシンポジウムを行った。このシンポジウムでは、ホーソーンとメルヴィルのテクストにおいて、彼らが互いにヨーロッパ思想の知識をすり合わせていた形跡が読み取れることを示した。高橋氏とは、ホーソーンのソロー観、エマソン観について論議した。平成 21 年度は、時代のコンテクストと作家たちの美学の相互関連を解き明かしたが、特にヨーロッパ思想がロックからルソー、カントへと推移するにつれて、経験主義、合理主義から人間の生得的な調和へ関心が移ったのに対して、アメリカでは経験主義と観念論が特異な形で混在し、政治や大衆文化にまで浸透していたとする仮説を検証した。博物学のような科学はエマソンやソローの性善説を裏付け、ホーソーンはそれを疑い、メルヴィルはそれをパロディ化した。この点はP. T. バーナムのような興行師にも共通する。領土拡大を正当化する「マニフェスト・デスティニー」の言説は言わば生得説だが、アメリカ建国の理念は白紙から価値を創造できるとするロックの経験論の影響を強く受けている。両者の螺旋状の絡みがアメリカの政治、文化を特色付けていると考えた。以上のような骨子に沿って、アメリカン・ルネッサンス文学作品をヨーロッパ思想と総合的に比較し、西洋思潮に対置する形で再定位させた。この成果として、日本アメリカ文学会での研究発表を大幅に修正した論文『アメリカン・ダイアレクティクスの行方』を日本英文学会の機関誌である『英文学研究』に投稿した。また、ここまでの研究を踏まえ、「モノ」と精神、経験論、生得論、身体、といったキーワードを用いてテクストを分析し、成果発表として『白鯨』の身体論と発生学的研究を組み合わせた「 “Clap eye on” Captain Pe(g)leg/Ahab」を『アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会) に掲載した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計　５件)
①竹内　勝徳　「“Clap eye on” Captain Pe(g)leg/Ahab―メルヴィルによる『白鯨』の原稿修正と反ナショナリズムの衝動」『アメリカ文学研究』 第 46 号、2010 年、査読有

②竹内 勝徳 「メルヴィルにおけるヨーロピアン・インパクト―アイリッシュ移民とアイデアリズムの解体」平成 19－21 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）報告書 <http://mstudio.kuas.kagoshima-u.ac.jp/moodle>、2009 年、査読無

③竹内 勝徳 「ヨーロッパ思想とアメリカン・ダイアレクティクスの行方」平成 19－21 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 報告書 <http://mstudio.kuas.kagoshima-u.ac.jp/moodle>、2008 年、査読無

④竹内 勝徳 “Streaming of Musical of Musical (Un)Consciousness: Signifyin(g) Process against Definer’s Community in Toni Morrison’s *Beloved*” 『九州アメリカ文学研究』第 49 号、61-72、2008 年、査読有

⑤竹内 勝徳 “Aspects of Speech and Body in *City of Glass*” 『九州アメリカ文学研究』第 48 号、51-60、2007 年、査読有

〔学会発表〕(計 2 件)
①竹内　勝徳　「ホーソーンとメルヴィル」日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部シンポジウム、平成 21 年 3 月 29 日、福岡大学

②竹内　勝徳　「アメリカン・ダイアレクティクスの行方――Donatello と Billy Budd を焦点に――」　日本アメリカ文学会全国大会、平成 19 年 10 月 13 日、広島経済大学

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　勝徳（TAKEUCHI　KATSUNORI）
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：40253918

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし